

第4章 多様な主体による土地資源管理の実施

1 調査の目的

人口減少や高齢化の進んだ集落では、集落在住者のみでは適正な土地資源管理が行い状況にある。そこで、在住者だけでなく、地域で活動を行っている地域内の各種団体や、出身者や学生を始めとする外部人材など多様な主体による管理が期待されている。しかし、これらの多様な主体は個別に活動を行っているため、その活動範囲は限られており、地域と多様な主体とのマネージメントを行う中間支援組織が必要となる。

今回の社会実験では、地域に密着した活動を行っている「株式会社わかたの村」（以下、「わかたの村」）がマネージメントを行い、多様な主体が連携した土地資源の管理試行実施等を通じて、農林水産業の再生とともに、地域産業の創出にあたっての土地利用に係る諸問題や課題の解決手法について検討した上でその実証を行う。

2 調査体制

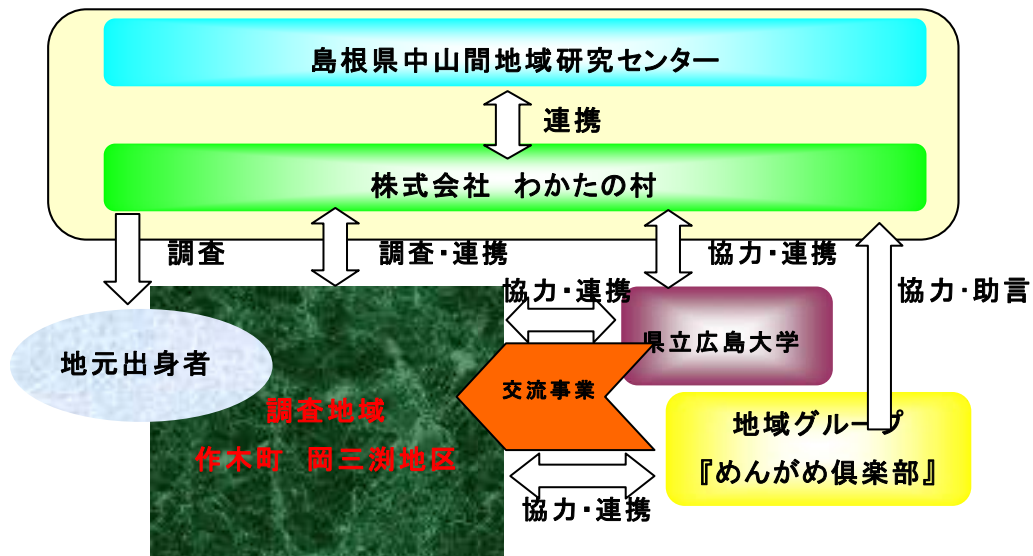


図 4 - 1 社会実験の調査推進体制

「島根県中山間地域研究センター」と「わかたの村」が協力し、「県立広島大学」、地域活動グループ「めんがめ倶楽部」や、岡三淵集落在住者だけでなく、出身者が加わった調査実施体制を構築して行った。

3 調査実施項目についての検討

「わかたの村」は、「第3章 5 広島県三次市作木町岡三淵における土地資源棚卸し調査」でも述べたように、作木町の地域コミュニティの維持管理、産業の衰退による地域活力の低下など、個人や地域だけでは対応しきれない課題解決や将来へ向けた活力の創出など地域資源を活用した地域トータルサポートを目的とした会社である。構成員は作木町に生まれ育った方々が大半であり、町内の文化・地形・人材・施設・農作物・自然などの多くの地域資源について精通している。そのため、社会実験開始前に、どのような社会実験を実施していくのか、地域を考えたうえでの具体案について検討していく中で大きな力となった。また、調査対象地域である岡三淵地区の協力も得られやすいというメリットもあった。

【岡三淵地区の土地活用についての検討案】

- ・ サファリ化（牛の放牧場、猪の放牧場）
- ・ 避暑地としての利用
- ・ 市民農園開設
- ・ 隔離された地形を利用したの特産となる米・野菜の生産（ブランド化）
- ・ 地域野菜の商品化
- ・ キャンプ場
- ・ 交流（定住）の拠点

土地活用の検討を行っていく上で、土地資源の活用を図るためには、「土地資源を次世代に伝える」という事も必要という考えに至った。そこで「現存する地域資源をいかに活用するか」「地域に負担の少ない活用方法」に着目し、作木町岡三淵の住民の日常生活にあるものを取り上げ、出来るだけ多くの可能性を見つけ出すこと目的に、今後の提案も含めた以下の6項目について社会実験を実施していくことになった。

- ・ 水田の活用
- ・ 学生の資源活用
- ・ 新たな産業の構築（漬物の加工販売）
- ・ クラインガルテンによる空き家、耕作放棄地の活用
- ・ 岡三淵の土地活用座談会

4 水田の活用促進についての検討

(1) 背景・目的

広島県立大学や地域活動グループが主催する数々の交流事業の取組みにおいて、常に調査地域の「ご飯が美味しい」という意見が参加者から出るという。そこで、この地域で生産される米の品質を客観的に評価し、ブランド化による稲作の振興による水田活用の促進について検討する。

(2) 岡三淵産米の品質評価

平成 20 年度に岡三淵で収穫された「コシヒカリ」、「ひとめぼれ」の食味品質評価結果は表 4-1 の通りである。

「コシヒカリ」の食味については、食味値が 81 と非常に高く、「おいしい米」であると証明され、食味格付においても最高の S ランクであった。しかし、外観評価については、「被害粒」「胴割米」の割合が高く、評価は普通 (B ランク) であった。

一方「ひとめぼれ」は、「コシヒカリ」には及ばないものの、食味値は 75、食味格付は A ランクであった。外観については、「未熟粒」「胴割米」「着色粒」があり、「コシヒカリ」同様 B ランクであった。

この結果から、岡三淵産米について食味は良いことが証明された。しかし、管理が行き届いていないため、外観品質で劣ると考えられた。外観品質を上げるために、栽培管理を徹底すれば岡三淵の米をブランド化できると考えられた。

「コシヒカリ」を例にとると、JA 出荷の場合おおむね 6,000 円 (玄米 30kg) 程度であるが、一般流通時には 10,000 円～12,000 円になっている。また、JA に出荷すると、県内他産地の米と混ぜて取扱われているため、地域の特徴を打ち出しにくくなっている。このことから、岡三淵産米の味の良さを売りにすることで、ブランド化を図り、米の単価を上げることで収益の確保につながり、持続的な土地資源活用になるものと考えられる。

表4-1 岡三淵産玄米の食味品質評価

コシヒカリ

食味成分・特性							
測定項目	測定値	目標範囲	劣る	やや劣る	普通	やや良い	良い
水分	14.1%	14.0~15.5%			★		
タンパク	6.6%	7.0%以下					★
アミロース	19.7%	18.0%以下			★		
脂肪酸度	7	16以下					★
スコア	81	80以上					★
食味格付	S	S					★

食味成分・特性							
測定項目	測定値	目標範囲	劣る	やや劣る	普通	やや良い	良い
整粒	73.9%	80%以上				★	
未熟粒	14.9%	10.0%以上				★	
被害粒	10.4%	5.0%以上			★		
胴割粒	9.1%	3.0%以上			★		
碎粒	1.3%	3.0%以下					★
他被害	0%	3.0%以下					
死米	0.6%	5.0%以下					★
着色粒	0.2	0%			★		
外観格付	B	S			★		

ひとめぼれ

食味成分・特性							
測定項目	測定値	目標範囲	劣る	やや劣る	普通	やや良い	良い
水分	13.9%	14.0~15.5%	★				
タンパク	7.5%	7.0%以下				★	
アミロース	20%	18.0%以下			★		
脂肪酸度	8	16以下					★
スコア	75	80以上				★	
食味格付	A	S				★	

食味成分・特性							
測定項目	測定値	目標範囲	劣る	やや劣る	普通	やや良い	良い
整粒	77%	80%以上				★	
未熟粒	16.5%	10.0%以上			★		
被害粒	6%	5.0%以上				★	
胴割粒	5.2%	3.0%以上			★		
碎粒	0.7%	3.0%以下					★
他被害	0.1%	3.0%以下					
死米	0.3%	5.0%以下					★
着色粒	0.3	0%			★		
外観格付	B	S			★		

(3) 岡三淵で稲作を行う上での条件整理

岡三淵産米の品質が良い理由や、稲作を行う上での優位な点、課題について、地域の特徴を考慮にいれ条件整理を行い、課題の克服について検討した。

稲作における優位点

- ・ 標高が高く、気温の日変化が大きい
- ・ 山あいには水田があるため、外部から病害虫が進入しにくい
- ・ 流れ出る山水が名水に該当する

稲作における課題

- ・ 高齢化や人口減少にともなう労働力不足
- ・ 生産量が少ないため、一般流通しにくく、販売に関して独自の販売ルートを確認しなければならない

(4) 労働力を確保するための提案

少子高齢化が進んだ岡三淵集落における労働力を確保するアイデアとして、地域出身者で都市部に住んでいる家族（二地域居住者）の活用が考えられる。実際、岡三淵における稲作の多くは二地域居住者によって行われており、生産者人口の確保はある程度は可能である。

稲作は、田植え、稲刈りなど一時的に重労働となる基幹作業があるが、他の作物と比較すると作業における機械化が進んでおり、多くの労働力を必要としない。そのため、一時的に帰省して作業を行う二地域居住者でも栽培しやすい作物である。しかし、草刈や水管理などある程度の日常管理は必要であり、二地域居住者ではこの点が課題となる。このため、二地域居住者による稲作を推進していくためには、日常管理を行ってくれる支援組織の存在は必要である。



図5-5 二居住家族による農作業風景

(5) 岡三淵産米のブランド化を図るための提案

前にも述べたが、岡三淵の米はおいしいが生産量が多いわけではない。生産量が少ないため、ブランド化を図るためにも独自の流通・販売のやり方を取る必要がある。流通や販売を考える上で課題となるのが、それにかかる経費と労力である。ノウハウを持たない地域の人が、行いやすい取り組みとして、縁故米の拡大が考えられる。岡三淵出身者が自己消費だけでなく、近隣住民や友人、職場の人など、その人間関係を利用して販売を行うのである。前項で述べたが二地域居住者は自らが稲作をし、その販売を行えば栽培履歴も把握できるうえ、消費者のニーズに応じた安心な農産物となると考えられる。

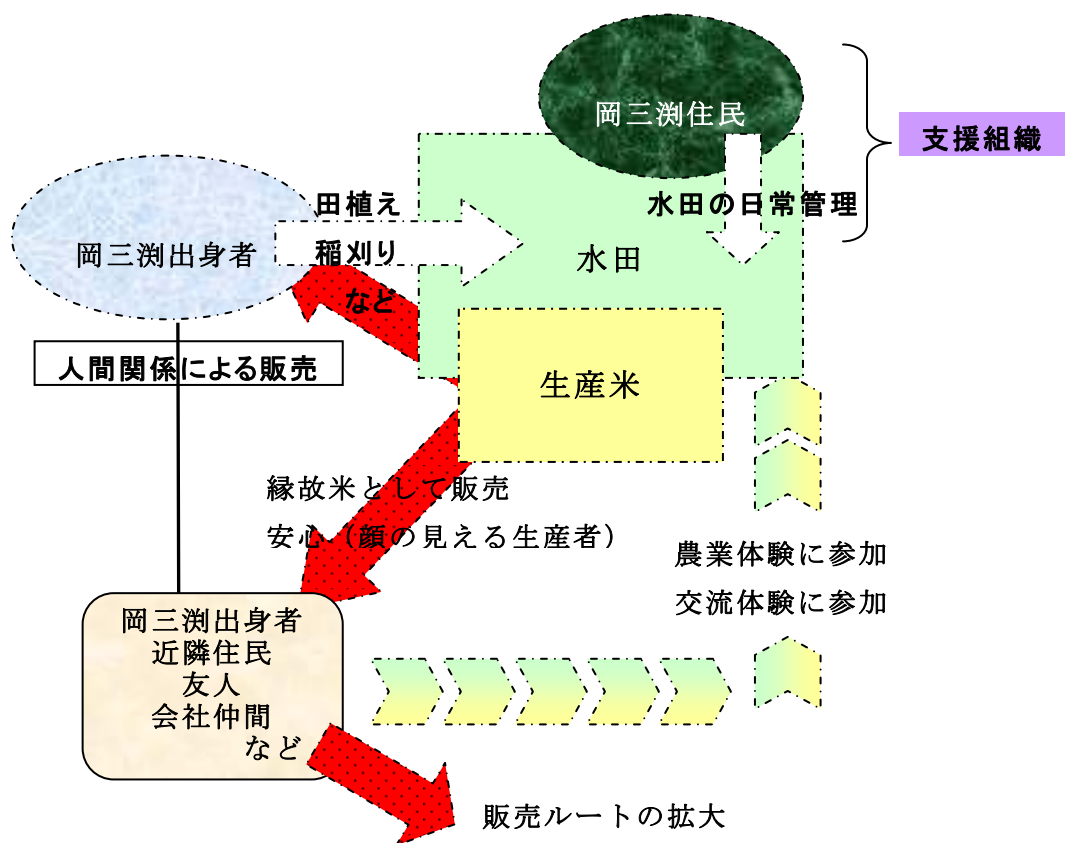


図. 5-6 出身者による米の生産・販売

この販売形態でどれくらいの顧客が必要かを考えてみる。現在、この地域では10戸で18tの玄米を生産しており、世帯員数を3人と仮定し、一人あたりの年間米消費量が約60kgであることから、必要顧客数は100

表5-3 岡三淵の米生産量と必要顧客数

現在の米生産量	18,000 kg
一人当たりの米消費量（年間）	60 kg
一世帯（3人家族）	180 kg
必要顧客数	100 戸

世帯となる。一見多いように感じられるが、1戸当たりになると10世帯で良い計算になる。自己消費を除けば、9人の顧客を確保すれば良いのである。もちろん、一方で良食味によるブランド化を進めることで知名度を上げ広く流通を図る必要があるが、人と人の繋がりによる「口コミ」の効果は重要と考えられる。

熊本大学文学部教授の徳野貞雄氏⁽¹⁾は、「個々の人間が確実に保有している個人の関係性や地域社会の価値を、再度下から積み上げていくという手法、言い換えれば「知り合いとの関係」を自分自身で再構築していく試みは無駄ではない。自分の暮らしの安全・安心を確保するためには、遠い世界の政界や財界の思惑に右往左往しているよりも、いま、自分が保有し立脚している人間関係資源をいかに有効に活用していくかが重要になってくる。」と述べている。

また、関原剛氏⁽²⁾は「一人の篤農家と多くの都市住民が関係を結ぶのは良いことだ。しかし、その米の粗利は、そのままでは「コミュニティ維持」へは流れない。その篤農家の高級車に変わるだけだ。それは「有縁」であっても「利己米」なのである。」と述べている。

つまり、個別販売になることで、個人の利益には繋がるが、コミュニティ維持（地域維持）の資金には残らない。それでは、有効なコミュニティにはならないし、持続的な土地利用にはならない。持続的な土地利用を促進するためにも、支援組織が米の生産から販売に関与し、販売で得た利益を農家とコミュニティ維持経費に当てるべきである。そのためには、地域における支援組織の存在が大変重要となる。

引用文献

- (1) 「赤の他人との関係」より「知り合いとの関係」、増刊現代農業「金融危機に希望に転じる」p186-193、社団法人農山漁村文化協会発行、2009年2月
- (2) 「貯金+保険」より「貯金+保険」+「結い」、増刊現代農業「金融危機に希望に転じる」p178-185、社団法人農山漁村文化協会発行、2009年2月

5 学生の活用による土地資源管理

(1) 岡三淵集落における学生の関わり

調査地域である岡三淵には県立広島大学の学生が、自己のスキルアップも兼ねて交流活動など地域支援活動を行っており、地域住民とのネットワークを確立している。交流活動については、田植え前の水田におけるドロンコ相撲大会の企画・実施や、地域の祭りに参加等、多岐にわたっている。その他にも草刈や雪降ろし等の高齢者に対する生活支援活動も行っている。また、耕作放棄地を使用して、地域の方の指導のもと野菜作り等にも挑戦をしている。



ドロンコ相撲

しかしながら、このような学生の活動経費は無く、人件費についても無償ボランティアとなっている。あえて対価をあげるならば、生活支援先が作った野菜をいただくことや、訪問時における食事の提供を受けている程度である。しかし、日頃「若い人」と接する機会の少ない地域の高齢者にとっては、学生との交流による活動は、楽しみでもあり、元気がでるようである。学生にとっても、高齢者から生活の知恵や知識を教わることで、自己スキルアップも図ることができ、また、新たな経験ができるため、非常に関心が高いようである。



野菜作り

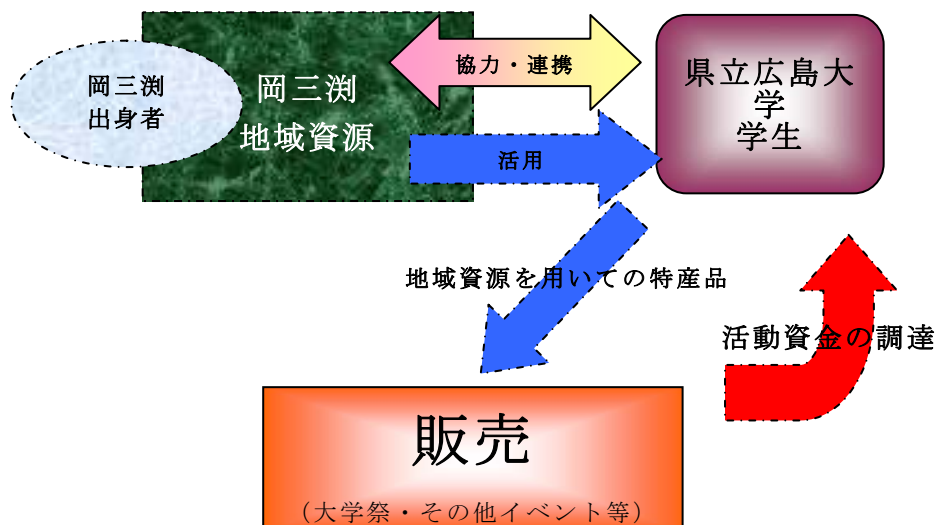


図 5-7 地域資源活用による活動資金確保イメージ

しかし、これらの活動を継続していくためには、活動経費の確保が課題となっている。そこで、学生自らが、地域資源を活用し活動経費を確保するとともに、加工にあたり地域住民の指導を受けることで、学生の技術習得や地域住民との交流について検討する。

(2) 活動資金確保のための学生による地域資源の販売

地域特産物とするものは、耕作放棄地で野菜を作り、販売することも可能であるし、軒にある果物をいただいて販売しても良い。そういった物を食品加工品などにして販売することもできる。ただし、食品加工には製造・販売の手続きなどが必要のため、学生主体で進めるのには難しい。そこで、今回は中山間地域に多大な被害をもたらしているイノシシに着目し、狩猟したイノシシを精肉後に残る毛や骨を携帯電話のストラップなどに加工し、販売することにした。この地域ではイノシシの毛や牙は金運が上がると言われており、縁起物となっている。



イノシシストラップ1



イノシシストラップ2

図 5-8 加工したイノシシストラップ

1月に三次市内でおこなわれたイベントでストラップを販売した。毛で作ったストラップは700円～、牙を使ったストラップは1,000円で販売し、すべて完売したものの、生産量が少ないため売上は総額8,000円に過ぎなかった。イノシシの毛や牙は無料で確保できたが、その他の部品に使った経費が1,235円かかり、今回は6,000円程度の利益であった。

今回、イノシシの毛や牙の加工・販売を実施し、以下の課題が明らかとなった。

- ①原材料の確保や、学生自らが加工・制作するので大量生産が難しいため、利益が少ない。
- ②販売方法、販売先の確保

活動資金を確保するためには、ある程度の利益が必要である。今回は、季節的な理由や地域の未利用資源を活用することを重視したため、イノシシの加工品を販売することにした。しかし、イノシシ加工品は学生のスキルアップという点では貴重な体験を行うことができたものの、活動資金の確保については生産量の少なさから課題が残った。今後、学生のスキルアップと資金確保を図るためにはイノシシ加工品より、野菜を自ら生産または委託販売する方法が適していると考えられる。高齢者は家庭菜園などで農作物を生産しているが、総じて自家消費する以上に作付けしている。さらに耕作放棄地など野菜生産を行える土地資源が、この地域には余っている。これらも地域の未利用資源と考えられ、有効利用を行えば活動資金を確保するには十分な資源と考えられる。

もう一点の課題である販売方法や販売先の確保については、学生だけで解決することは困難と考えられる。今回は「わかたの村」が行ったイベント出店に合わせて販売したため、学生の負担も少なく実施できた。今後も持続的な活動を実施していくためには、「わかたの村」のような地域活動団体と連携していくことが重要と考えられる。

6 農地を有効活用するための特産品の開発支援

(1) 特産品についての検討

高齢者が多く居住する地域において農地の有効活用を図るためには、地域住民である高齢者が参加できる特産品の開発が重要となる。一言に特産品といっても、新たな品目を探すのではなく、従来からある地域の産物に着目することが、高齢者の負担も少なく、取り組みやすいと考えられる。

そこで、高齢者の持つ技術、地域にあった作物、自然、栽培方法等がすぐに活用でき、取り組みやすいものを検討した結果、各家庭で作られている「漬物」を地域の特産品として販売することにした。

「漬物」は高齢者世帯でも日頃から生産されている品目であり、新たな負担も少なく、高齢者でも参加しやすい。なおかつ、地域の特徴、作り手の個性による味の違いもあり、少量でも販売可能な品目と考えられた。しかし、高齢者のみでは加工品製造に伴う事務手続きや、販売時の負担が課題となる。そこで「わかたの村」が製造・販売を行い、地域住民は「わかたの村」が行う漬物生産に参加する形式をとった。

(2) 漬物の加工販売

1) 加工販売に向けての準備

漬物を製造販売するにあたり、『わかたの村』が食品の製造業の届出を行った。漬物の製造業届けは以下の様式である。

なお、漬物生産は、地域に存在する加工所で高齢者の手で行い、原材料の調達は、各家庭にある野菜を使用することにした。

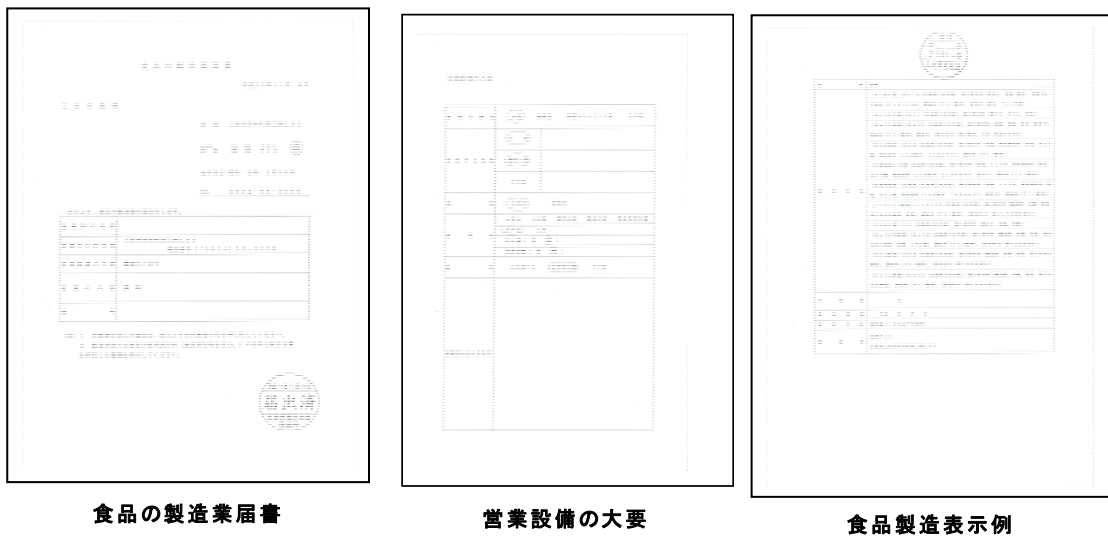


図 5-9 食品製造に必要な届出書類

加工者は地域の女性高齢者 3 名で、合計 200 パックを生産し、人件費を含め、経費として 20,000 円を使用した。



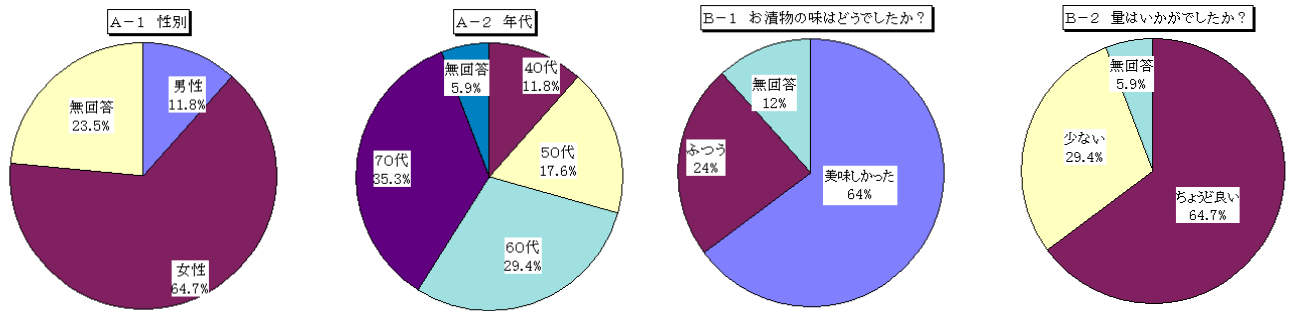
パック詰め作業



パック詰め漬物

2) イベントにおける試験販売

『わかたの村』が参加するイベントで試験販売を行い、準備した 200 パックを完売することができた。今後も継続的に活動を行うために消費者のニーズを把握する目的で、購入者にはがきを渡し、アンケート調査を実施した。その結果は以下のとおりである。

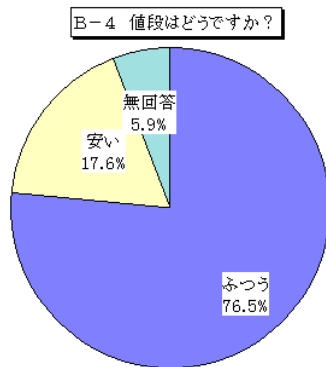


B-3 どのお漬物が一番お口に合いましたか？

- うり
- 全部美味しかった。ソーメンうりの歯ごたえが良かった。
- ソーメンうりの酢漬
- かす漬。大根。
- セロリ。
- 全て少量なんで美味しく食べられました。味もそれぞれ特徴があって、飽きませんでした。
- セロリ。
- 白菜。
- 大根の白い甘酸っぱいの。
- 大根。
- キューリ。
- 変わった、そうめんうりの漬物。
- 広島菜のような葉の野菜。

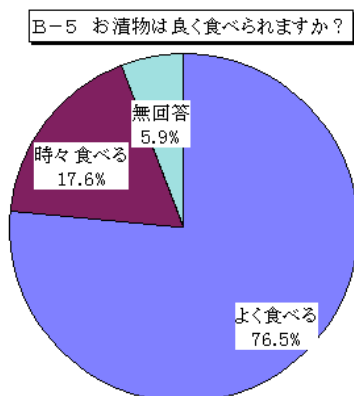
C ご意見など

- もう少し塩味が欲しい。
- 塩加減が私にはちょうど良かった。量がもう少しあれば、
ご飯の量が一膳増える。
- 値段はコンビニで買うと思えば普通。
- 少し味が薄かった（白さい）。
- きゅうりは味がなかった。味が今いち。
- 三次では、どこのお店で売っているのか教えてください。
- どこで買えるの？



B-4 安いと答えた方はいくらが適当な値段だと思われますか？

- 180円位
- 150円
- 200円



販売風景

アンケートの回答数が少ないため、この結果から判断するのは難しいが、販売時における購入者の評価も「味が良いので、また買いに来た」、「来年もJA祭りで販売するじゃろ」など、高評価であった。今回は130円/パックで販売したが、単価については150円位まで上げて購入者に買っていただけるようである。

試験販売後、真空パックによる保存期間の延長を試みた。2週間常温保存し、味について確認したが、味の変化は認められなかった。しかし、何種類もの漬物を一緒にしてパックすると、味が混ざり合ってしまう欠点も見つかった。

また、購入者の意見やアンケート結果を住民に伝えたところ「売れるのであれば、これからも作っても良い」との言葉を得ることができた。住民達は普段、何気なく作っている「漬物」が売れる商品だということに気づいていない。もともと販売する気が無いかもしいが、販売することにより利潤を得ることができるため、高齢者の活力が高まり、耕作放棄地へ作付けを開始することによる原料生産への道が開けると考えられる。今回の「漬物」販売は試験販売のため、少量ではあったが、約6,000円の利益が生じており、住民のやる気が生じ始めている。

このやる気を継続するために、住民だけでは困難な販売許可申請などの事務手続きや販売ルート確保などを手伝う（代行する）『わかたの村』のような支援組織（支援団体）が必要である。

7 クラインガルテンによる空き家、耕作放棄地の活用

(1) 背景および目的

クラインガルテン（Kleingarten）とは、ドイツ語で「小さな庭」を意味する。ラウベという休憩小屋を併設して、ここに滞在して庭作りや野菜作りを楽しみ、リフレッシュをするというものである。ヨーロッパでは癒しの空間、コミュニティの形成の場として約200年前から行われていたものである。

近年、田舎暮らしを望む人、体験したい人が多くなっている。その他にも、グリーンツーリズムや、体験民宿、貸し農園など様々な方法がある。都会の喧騒を離れ、自然に触れることで人間本来の自然な生き方とおし、人生を楽しみたい人が増えていると考えられる。

そこで、空き家、耕作放棄地の活用を促進するためにクラインガルテンを開設し、体験者へのヒアリング調査により、継続的な活動方法について検討する。

(2) クラインガルテンの開設・利用

【体験者プロフィール】

体験者	広島県広島市在住 30代（独身男性） 職業 公務員
	広島県広島市在住 30代（夫婦） 職業 会社員
体験期間	平成20年11月～平成21年2月
体験場所	住宅 広島県三次市作木町伊賀和志 農地 住宅前の休耕田
体験内容	休耕田を利用した畑作り 田舎生活および体験 町民との交流
体験補助者	1名（男性）

※調査対象地域は作木町岡三瀬であるが、調査時期が冬季となり積雪が危険なため住宅・農地は同町の伊賀和志地区にあるものを活用した。

【住宅・畑について】

今回の社会実験趣旨や「わかたの村」の活動について所有者に相談したところ、数年前より空き家となっていた「M氏邸」を活用について、快諾いただいた。

【体験準備】

10月下旬に畑作り用に開墾

時期が遅いため苗植えとした。

用意した種類は、スナックえんどう・きぬさや・そら豆・キャベツ・たまねぎ（白）・たまねぎ（赤）・コウサイタイ・オータムポエム・水菜・チシャの10種である。

【体験内容】

日 付	内 容
11月15日	体験農園の畦作りとマルチング 準備していた苗を植える 所有者関係者との交流（夕食会）
11月16日	作木町文化祭に参加
12月3日	作物の様子を確認
12月4日	霧の海を楽しむ
1月11日	伊賀和志地区、とんどに参加
2月8日	町内の会社企画イベントに参加

体験者には月に1回程度の割合で来訪いただき、休耕田を利用した畑作り、田舎生活、田舎体験、町民との交流を楽しんでいただいた。

以下は体験内容に対する感想である。



図 5-10 農家の方からの農作業指導風景

【畑作りについて】

体験期間が短かったため、収穫にまではいたらなかったのが、残念である。しかしながら成長過程を写真に撮って電子メールで送っていただいたので訪れなくても、畑を近くに感じる事ができた。



図 5-11 クラインガルテン体験者への畑の連絡写真

【田舎生活について】

夜の暗さに気づかされる。普段は真っ暗になることがないので新鮮であった。家の裏にあった柚子を使っただの鍋が美味しかった。家についても定住するのではないので、バス、トイレ等が利用でき、キッチン、冷蔵庫などの最低限の必要品があれば良い。逆に少くらい不便なほうが田舎生活を味わって、普段がいかに便利な生活をしているのかがわかり勉強になる。三次ならではの霧の海が見ることができ良かった。

【田舎体験について】

とんどは、都会ではおこなわれなくなったので楽しかった。

新酒のイベントに参加して、お昼は「豆腐づくり」にも挑戦してとても楽しかった。



図 5-12 地域の農産物セリ大会に参加風景

【町民との交流について】

畑作りの指導をしてくださった方が親切に教えてくださったので良かった。関係者の方が特に気遣ってくださり、町民の方々との交流が図れたと思う。

(3) 今後への課題

以上の事から、滞在して庭作りや野菜作りを楽しみ、リフレッシュし、また癒しの空間、コミュニティの形成の場としてのクライנגルテンの目的は達することができたと考えられる。しかしながら、実際に運営していくにはまだまだ課題が多く、具体的に以下のようなものがある。

- ・ 料金の設定（滞在のみ、または畑利用のみなどのメニュー化）
- ・ 農地の作物の管理
- ・ 所有者と利用者の契約管理、利用者の受付管理、連絡調整など
- ・ 農作物作りなどの指導者
- ・ 使用しないときの家屋の管理
- ・ 利用者増の場合の農地の確保 など

これらのことを解決できれば、特別な「クライングルテン」の施設（ラウベなど）を作ることなく地域にある空き家などの土地資源を活用できる。また、放棄年数が長く、かなりの雑草などが生えている耕作放棄地などは、一時的に「焼畑」を行った後、無農薬栽培など自然農法を行う地域にすることで、さらなる利用者の増加が見込まれると推察される。

8 地域団体との連携による土地活用についての検討

岡三渚で育ち、現在も二地域居住生活をしながら、岡三渚で農業やその他に交流活動をしている「めんがめ倶楽部」と、これからの土地資源活用について検討した。その結果、以下の点について提案をいただき、今後実施したい活動について意見交換を行った。

- ・資源には「人」も含まれる
- ・自然資源、資産の理解（山・農地・川などの自然と建物）
- ・交流事業

『めんがめ倶楽部』紹介

【目的】 作木町下地区を拠点として地域の自然環境等を見直し、保護、活用することによって地域の振興に寄与することを目的として活動している

【設立】 平成17年8月 6名で発足

【報奨等】 「RCCエコロジーファンド グリーン賞」 など

「めんがめ倶楽部」との意見交換の内容は以下の通りである。

資源には「人」も含まれると言うのは、「そこに住む人々の生活する中で培った技が資源であり、財産である」という意味である。その上で、地域にある自然資源を理解することで、その活用法が決定できるし、考え出すこともできる。人資源がなければ、自然資源の活用もままならない。その資源は消えていくものもあるし、忘れ去られるものもある。

また、その資源は都会には無いため希少価値が高いと思われ、必然的に都会との交流事業のニーズは高まると考えられる。

そこで、今後実施したい土地資源などを利用した活動について、お伺いしたところ「岡三渚田舎生活実践塾（仮称）」という活動を年間の活動として、行いたい意向があった。この「岡三渚田舎生活実践塾（仮称）」の活動内容としては、現在以下の4点を想定している。

- ・農業体験
- ・岡三渚自然探検
- ・収穫農作物での宴
- ・四季の岡三渚体験

この活動については岡三渚での「食・住」を体験してもらい田舎生活の楽しさ、厳しさを知ってもらい、現在の便利さを再認識してもらうためのものである。便利

さの中で失ったもので、知っておくべきものもかならず見つかるはずであると考えられる。

「農業体験」については、農業を指導できる「人材」があり、農地として使用できる土地資源があり実施可能である。「岡三淵自然探検」には、この地域には 170 万年前は火山であった女亀山があり、その噴火によって噴出された火成岩の玄武岩、小粒の穴があり「臼」としても利用された。作木町光守地区に存在する古墳の石も同時期のものであり、噴火の状況を感じることができる。また、下記のような自然豊かなこの地域に棲息する動植物なども観察することができる。また、「かんな流し」の痕跡など、歴史についても感じることができる。

鳥	オオルリ、サンコウ鳥、クマタカ、カッコウなど
虫	ギフチョウ、ウスバシロチョウ
植物	トリカブト、カンアオイ
木	サルスベリ、ブナ

※岡三淵は、渡り鳥の中継点にもなっている。

「収穫農作物での宴」は「四季の岡三淵体験」と重複する点もあるが、米、野菜、猪などこの地域で採れるものを使用した交流の場を設定し、春は山菜、夏などには蛍、秋はキノコ、冬は雪など、季節を感じることができるものがこの地域にはあり、四季を楽しむことができる。

しかもそれら交流事業の基礎となる「人材」、「土地資源」はあるが、まとめていくのは大変である。この事業を円滑に進めていくためには、この地域を束ねていく実践支援組織の役割が重要と考えられた。



図 5-13 炭焼き交流風景



図 5-14 なばこぎ交流風景

9 中山間地域における土地利用を進めるための中間マネジメント組織の必要性

～社会実験から見てきたもの～

今回の社会実験のように、現存する地域資源を掘り起こす、あるいは再認識することにより、様々な土地利用方策を考察すること自体は可能と考えられる。

しかし、土地所有者と利用者（利用希望者）とが直接的に関わり合いを持ち、土地資源を活用していくことは、現状では非常に困難である。まして、高齢化、過疎化がすすむ地域においては、地域在住者だけで土地利用を進めていくことは大きな困難を伴う。この課題を解決するために、都市部に住む出身者に着目し、孫世代との積極的な関わりを保つことが必要である。しかし、土地の有効活用を図るためには、出身などの「血縁」だけで考えるのではなく、土地の有効活用を図るために「血縁」以外の新たなネットワークが必要である。このため所有者と利用者（希望者）とをつなぐパイプ役である中間支援組織が必要であり、この中間支援組織は所有者・利用者どちらかに偏った立場ではなく、お互いの協力者でなくてはならない。

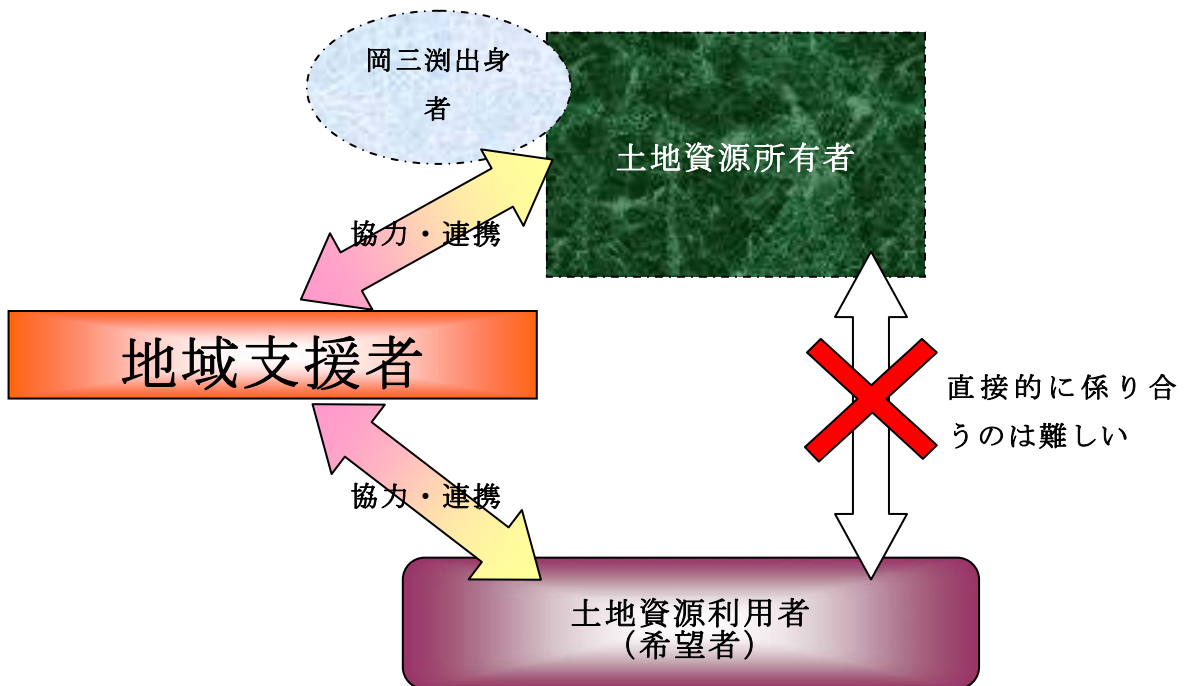


図 5-15 地域支援ネットワーク

今回連携して社会実験を行った「わかたの村」の存在は、まさに図 5-15 の「地域支援者」にあたる。ただし、「第 3 章土地資源棚卸し調査」における所有者への意向調査でもわかるように、民間団体では信頼性、信用性に欠ける点があり、所有者には受け入れられにくい傾向がある。

しかし、今回の調査地域が岡三湊という作木町内の一集落であったがために、「わかたの村」のような地域に密着した民間団体でも地域住民の信頼を得ることができ、受け入れられることが可能であった。これが作木町内全体であればどのようになっていただろうか。詳細な地域情報の集約や、住民との信頼関係の構築には、多くに労力や時間を必要とするため「わかたの村」単独では対応不可能である。この点で言えば、公的な機関の方が広い地域をカバーできるという点で優れていると思われる。実際、「わかたの村」の活動エリアは作木下地区までしか及ばない。しかし、より地域住民の思いを活かすために地域との密着度を高め、土地資源の活用の提案を進めることができたのは、地域密着型の活動を行っている「わかたの村」ならではの利点と考えられる。

一方、行政に代表される公的機関については広い地域に対応することは可能であると考えられるが、反面、地域の詳細な情報収集やきめ細かいニーズへの対応が困難になってくる。

このように公的機関、民間団体それぞれに一長一短があるが、互い密接に連携し、短所を補い長所を活かすことにより、地域の諸問題を総合的にマネジメントする支援組織体制を構築していくことが可能と考えられる。今回は社会実験として短期的な取組であったが、地域住民も「支援していただけるなら、できる範囲ではあるが協力する」といった前向きな意向も確認できたことから、今後「わかたの村」を中心に、行政機関や大学生、出身者などの多様な主体が連携した持続的な取組につなげることが可能と考えられる。

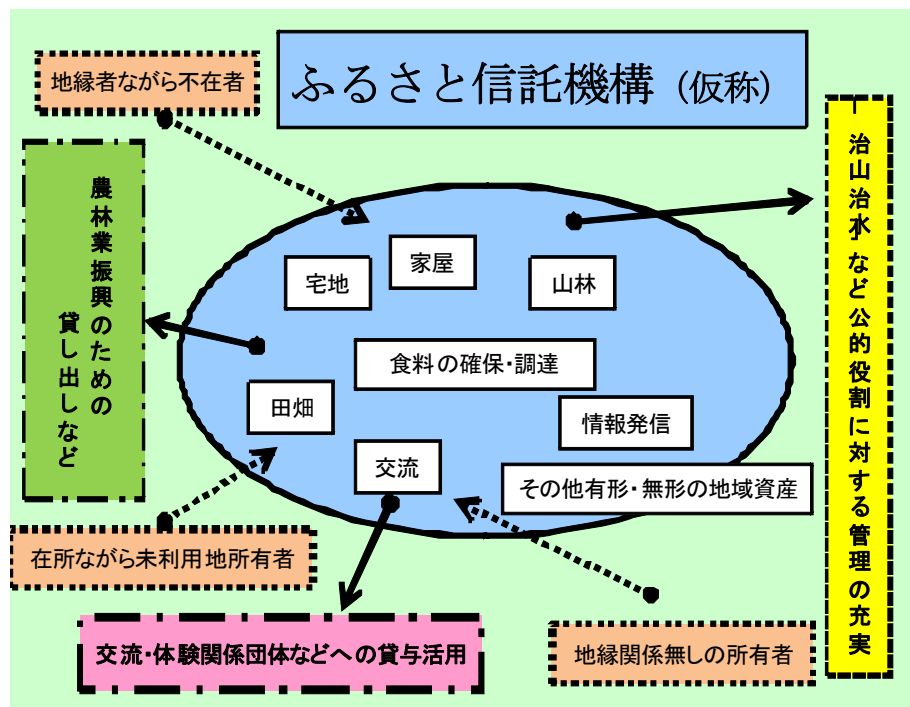


図 5-16 支援組織体制イメージ